

「日本パペットセラピー学会の歴史と展望」

原 美智子（日本パペットセラピー学会理事長）

1972年に高村 豊（日本パペットセラピー学会現副理事長）が特別支援学校教師時代に、自閉症児のパニックなどの激しい行動異常に翻弄されていた中で、腹話術人形の特性に眼をつけ、かかわりの媒体としてこれを導入したところ、自閉症児が強い関心を示し、行動調整や言語獲得指導に効果が得られた。以来、腹話術人形に関する教育効果の研究を続けていた。

1988年に名古屋で、世界ウニマ大会（国際人形劇フェスティバル）が開催された。その時に、フランスから「人形劇とセラピー協会」所属の精神科医らが来日し、シンポジウムが開催された。この機会に高村は、フランスの指導者から、肢体不自由児でも使用可能なパペットを紹介され、これを肢体不自由児の教育現場に導入した。

この大会を契機に、翌年1989年に「日本人形劇とセラピー協会」（会長：丹下 進）が設立され、海外の研究者と交流を図った。しかし、学会設立には発展せず、会長の死去とともに次第に協会は縮小されて、現在では活動を休止している。

一方、関西でのこの活動とは全く関連なく、1992年より、群馬大学教育学部障害児教育講座で、原 美智子（群馬大学教授/現名誉教授・日本パペットセラピー学会現理事長）が、知的障害児や自閉症児のコミュニケーション能力発達促進の方法を模索する中で、腹話術人形の発話機能に着目し、これを群馬大学付属の特別支援学校での教育現場に導入した。

同時に、群馬医療腹話術研究会を立ち上げて腹話術人形（パペットと名付ける）の効果について研究を開始した。

2007年にパペットの治療的効果のさらなる研究と各研究分野へのパペットセラピーの普及を目的に「日本パペットセラピー学会」を設立した。

腹話術経験のある、教師、医師、看護師、理学療法士、医療ソーシャルワーカー、音楽療法士、腹話術師などが会員となり、実践研究を行い、年1回発行の学会機関誌に発表した。

江川久美子は、群馬県の学校カウンセラーとして小中学校の児童生徒のメンタルヘルスや心理カウンセリングにパペットを導入し、吉田和令、高村豊、出山雅章らは学校教育に導入した。

また、東義也、東海林照子らは幼児教育に導入し、原美智子、末永久志、千葉俊一、近喰ふじ子、竹内紀子らは医療・療育現場で患児のメンタルヘルスに導入した。

そして、須賀綾子は、小学校の読み聞かせボランティアとしてパペットによる読み聞かせを実践している。

2011年に発生した東日本大震災に際しては、被災地支援として、早期よりパペット介入による子どものメンタルケアに関わり、現在も継続している。

また、イスラエルシュナイダー小児医療センターやハーバード大学医学部所属のパペットセラピストなど、海外の研究者との交流を図り、パペットセラピーの研究を深めている。

今後も起こりうる自然災害現場での緊急のメンタルヘルス、虐待児へのかかわり、発達障害児へのコミュニケーション促進などパペットの有効性に対する認知度の向上を目指して行きたい。

（敬称略）